

日本語地図

著者	国立国語研究所
発行年月日	1973-09
シリーズ	国立国語研究所の歩み ; 4
URL	http://doi.org/10.15084/00001572

日本言語地図

国立国語研究所

昭和48年9月

I 日本語地図のための調査

発端 国立国語研究所が日本全国を対象とする方言地図の作成を決定したのは、昭和29年のことであった。記録によると、研究所は昭和24年度（発足第一年）にあたって、「外国の言語地理学の研究」を江実氏に委託している。しかし、これは直接にはこの計画と無関係だったらしい。所長の助言機関である評議員会で、東条操・中島健蔵氏が研究の推進を強く訴えたことが、刺激になったのだという。

日本語の地理的変種は多種多様である。これを一望のもとにおくことは、識者・研究者の永年の希望であった。新村出氏は、パリに遊んだ折、完結したばかりのフランス言語地図をまのあたりにして、うらやましさを禁じ

えなかつたという（明42橋本進吉宛書翰）。その事情は五十年後も変わっていない。

歴史の項を見てほしいが、日本全国を対象とする方言地図は多くない。個人の力ではどうしようもないということが原因だろうが、国立国語研究所が発足し活動しはじめたの機会に、なんとか実現させようという気運の盛り上がったことは、むしろ当然であった。

目標 国立国語研究所の行うべき事業のひとつに「方言辞典」の編集刊行がある（↓本研究所設置法）。「沖繩語辞典」（昭38）の刊行はその成果のひとつだが、全方言事象の全国図ができれば、辞典の形はなさずとも、それなりに目標をはたしたことになる。

しかし、すべての方言事象を新しい調査に

よって収集することは、国語研究所といえども不可能である。そこで「方言地図」作成のための調査を開始するにあたって、われわれは次のような目標を立てた。

一、現代日本標準語の基盤とその成立過程を明らかにする——現代日本標準語は、現代文章語とともに発展しつつある。関東とくに東京のことはを基盤とするが、同じ表現を使う地域はどこにどれほどの広さで見られるのか。他のいかなる表現の分布領域と対立しているのか。さらに、標準語はどのような経過をたどって成立したのであろうか——方言地図は、それを説明するはずである。

二、日本語の方言的差異の成立と、各種方言語形の歴史を明らかにする——たとえば、

上方方言は日本語の中でどのような位置を占めるのであるか。各種の一見珍奇な方言語形も、それぞれ由来があるはずである——方言地図は、これらについての解答を与えるはずである。

純粋な言語学的興味からは、また別の目標を立てることができようが、われわれは以上のように考えた。

計画 昭和30年・31年の二年間は、準備期間にあてられる。

実際の調査は、研究所員だけでは手に負えないので、全国各地在住の研究者にも委託して行うことになるだろう。これらの研究者を地方研究員というが、この人々にも調査の目的や方法を理解してもらわなければならない。

調査地点はどのように選ぶか、調査対象としてどんな人について尋ねるか、質問はどのような方式によるか、調査項目として何を選ぶか、なども決めなければならない。

調査地点は、最終的に二千四百地点ときまつた。これを北海道宗谷岬から沖縄波照間島まで、満遍なくばらまく。調査対象は、各地点男子一名とし、明治36年生まれ（調査終了時満六十歳と考えた）を最下限とした。この

年層は、昭和35年現在約四百八十万人と推定されるので、われわれはそのうちの二千人についてひとりずつ調査したことになる。質問法は、面接法とし、多くの調査者による共同調査なので、絵を使ったり、全国統一した質問文——標準語を与えずに聞く（頭の上の毛のうずを何というか式の）いわゆるナゾナゾ式——によることにした。

調査項目については、地方研究員からの提案を求め、さらに調査センターである国立言語研究所地方言語研究室での独自の考え方を加えて、準備調査を行いつつ、絞りに絞って、二百八十五項目とした。この数は世界の方言地図の調査項目数と比較して極端に少ないが（五分の一？）、現実の前にはあきらめざるをえなかった。

具体的には、シエ音・クワ音などについての若干の音声項目以外は、単語の違いに関するものである。顔・目・糸・綿・太陽・月・馬・牛・魚・米・貸す・借りる・大きい・小さいなどの日常語とともに、つむじ・ものもらい（麦粒腫）・まないた・すりこぎ・一昨夜・明々後日・おたまじゃくし・かたつむり・かまきり・玉蜀黍・胡座をかく・片足とびをする・擦ったい・眩しいなどの方言変種

の多い項目が選ばれている。

調査第二年度の昭和33年からは、沖縄県地方が調査地域に加えられることになり、本土部とまったく区別のない調査が行われるようになった。返還かなり以前だっただけに、付記しておいていいことだろう。

こうして計画がまとまり、完成すべき方言地図の名も「日本語地図」ときまつた。

実施 二千四百地点での調査は、昭和32年6月24日にはじまり、約八年間の歳月を費して、昭和40年8月14日をもって終了した。

調査に参加した人は研究室員（調査実施時の柴田室長・野元・上村・徳川各室員）を含む六十五人で、調査のほとんどは、地方研究員の手によって行われた（総地点の92%）。岩手の小松代融一氏、鹿児島の上村孝二氏とともに83地点、新潟の剣持準一郎氏は79地点を訪問した。いづれも大県であるし本務のかわらぬ調査だから、さぞ大変だったろうと思う。沖縄の仲宗根政善氏も期間5年45地点だが、離島の多い土地柄だけに、その苦心はなみなみならぬものがあったに違いない。ここに挙げなかった人々も、それぞれ多くの労力をさいてくださった。

苦心 面接調査だから、いずれにせよ現地に

出かけていく必要がある。日本も案外広く、僻地も少なくない。バスの通わない所もあるから、実際なかなか大変である。戦後生まれの方言研究者にはオーナードライバーも多いが、この「日本語地図」の調査で自家用車を使ったという話はきかない。そのかわり、自転車で雨にぬかぬ道を走っていたところ、がけからころがり落ちて危く九死に一生を得たとか、暗い夜道を二時間以上歩いて途方にくれていたところ、折よく通った材木トラックに拾われたとか、郵便船で離島に渡るうとしたら、危く大波にさらわれそうになったとかいう話は、枚挙に暇がない。

ようやく現地にたどりついて、こんどは適当な方言提供者をさがす苦労がある。年齢の制限についてはすでに述べたが、難物は居住経歴についての制限だった。なるべくその土地らしいことを聞こうというので、へその土地生まれでその土地育ち、大人になってからのよこでの生活経験(三年以内)という条件がつけられていた。土地によってはたいして支障にならないのであるが、正常な人ならこんな経歴の人はほとんどないといった出稼ぎ村もある。役場で尋ねてもわからない、道行く人にきいても心当たりがない、しかたが

ないのでとうとう警察に頼みこんだという話もある。適当な人がついに見つからずその日は空しく帰宅して、改めて出直したなどというケースさえしばしばあった。研究所の用意した費用は僅かなものだったから(昭和32年、一地点平均二千元)、セクターとしては心苦しい限りであった。

どうやら方言提供者にめぐりあえても、その人が老練さみだったりすると、めもあてられない。以前は明晰な人だったに相違ないのだが、こちらの質問の趣旨をうまくのみこんでくれない場合など、帰りのバスの時刻は気になるし、泣くに泣けない気持ちになる。しやべり過ぎの人も困りものだ。わざわざ遠くから訪ねて来たと喜んでくれる気持ちはよくわかるが、質問と無関係な昔話をながながざれると、明日の予定もあることだし、ほんとうに困ってしまう。同席者がいて目ざす方言提供者の回答を攪乱するのにも弱りはてる。こちらが納得しないような顔をする、同席者はますます言いつのる一方、当の提供者はいよいよ押し黙ってしまふ、などということもある。

質問は全国的視野の下に選ばれているから、各地方研究員の担当地域内では、全く地

域差の出ない項目がいくつもある。こんなわかりきったことをなぜこれほど苦労して尋ねる必要があるのかと、非情なセクターを遠く恨んだ人は、さぞ多かったであろう。調査そのものが統一の名のもとに規格化されているのだから、なおさらである。

もっとも、すべての調査が以上のような悲劇的なものばかりだったとは言えない。緑濃しい山野を歩き、満天の星のもとに宿り、失われた人の情けに触れることができるのは、方言調査の余徳である。思いがけぬ珍らしい言語現象の生きた姿に接することができるのも、現地調査ならではのことと言える。調査がひととおりすんで、ほっと一息いれる一杯のお茶はなによりの御馳走だし、家族の幸せや農業の行く末を語り合うのも、しみじみとした勉強になる。

こうして後髪を引かれながら調査地点を辞去するのであるが、長い間人の行く手をはばんで来た溪谷をのぞき、何百年來遠国からの物資を通過ぎてきた峠を越え、村の創設以来亡き人を送り嫁を迎えた細道を下って、方言の差異を生み出し、新しい表現を運んできた環境に、そぞろ思いをいたすのであった。

(徳川宗賢)

II 日本語地図作成の手順

日本語地図作成のための、調査の結果として、方言言語研究室には、二八五項目、計約五万枚のカードが、質問項目別に分類され、カードボックスに保管されている（なお、原調査票は調査者の手許に保管されている。これは、地震などの災害時に貴重な資料を一挙に失うことをおそれるためである）。

カードの見本を次に示そう。

1)は項目番号で、見本の「〇一」は「まむし」の項目、2)は回答語形の記入欄、3)は被調査者・調査者・同席者の、その語形をめぐる説明などの注記欄、4)は地点番号（方言調査基礎図」のシステムによる。上四桁は国土地理院五万分一地形図の枠に相当する地域を示し、下二桁はそれをさらに百等分した

一定の枠を示す)の記入欄である(見本の7355.81は大分県直入郡久住町久住)。

1)	011	日本語地図	地調(58)-14	4) 7355.81
2)	mamuji		3) <mamuji は希。 mahebiがふつう。 また雄を iratakaと いう>	
	mahebi			

(実物は図書カード大である)

さて、カードに基づいて言語地図が完成するまでの作業過程を説明しよう。現在、地図編集の仕事に直接たずさわっている者は、研究員五名、研究補助員一名(二名の期間もあった)、非常勤職員一名(グロスターズ師)とアルバイト数名であるが、複数の人間が大量かつ複雑な資料を一貫した原理でミスのないように処理するためには、あらかじめ一定の作業手順が考慮されねばならない。一つの語形に符号を与え、しかも多色刷りの地図を作ることは意外に厄介な仕事であり、作業経験を積むにつれてその手順の不備を是正する必要に迫られたが、現在ではおよそ次の手順で作図・編集が行なわれている。

作図項目決定↓作図構想↓第一草稿作成↓

第一検討会↓第二草稿作成↓第二検討会↓
原稿作成↓最終検討会↓見出し内容作成↓
清書用併用版作成↓併用版から清書版へ転写↓
各色清書版作成↓全カードを地点番号順配列に戻す↓
注記一覽作成

一、作図項目決定↓作図構想

一つの質問項目ごとに一枚の地図が作られるとは限らない。項目によっては方言量(語形の種類)が極めて多く、凡例スペースの制約や地図が見にくくなるため、止むを得ず二枚の地図に分割して出版したことがある。また、比較的大まかな分類による地図のほか、ある語形群について小変種を分出し、別図(詳細図)として出版した項目や、動詞・形容詞については、前部分と後部分と(たとえば、クスグッタイの KUSU-GUTTAI)を二枚の地図に分けた項目もある。そのほか、二つの相互に関連のある項目について、各項目の図と別に二項目の総合図(「あざ」と「ほくら」の総合図など)を作成して語彙の体系的側面を図示したもの(第六集では三項目の総合図も予定している)もある。

二、第一草稿作成↓第一検討会

項目ごとに地点番号順に並べてあるカードを語形別に分類する。この段階では音声的変

種を含め少しでも差のある語形は原則としてすべて分出するが、同一音声の個人的表記差と認められるもの〔i〕と〔ii〕・〔n〕と〔ni〕・〔u〕と〔ui〕・〔a〕と〔ai〕など)はまとめる。そのほか、〔x〕と〔y〕と〔z〕などのように将来の完成図で分出する見通しのない変種はこの段階でまとめることがある。

各語形には、「今は使わないが、自分が昔使った」「新しいことば」「ユーモアのある言い方」「下品なことば」「共通語的場面を使う」「隠語」「こどもに対して使う」「たまにしか使わない」などの注記のあるものもあるが、この段階では、原則として、すべての語形を採用する。ただし、採否が問題になりそうな注記のあるものはチェックし、検討会にかける。

なお、一つの項目についての一つの語形を記入したカード(単用)と称する)と二つ以上の語形を記入したカード(併用)と称する)とは、別々に分類する。これは地図にスタンプを押す作業の能率化のためであるが、とくに、多色刷の地図では、色刷の版を作成する必要があるため、この方法が有効である。

草稿分類がすむと、分出した語形をいくつかの語形群(語類)に分け、それぞれの語形

一定の色(赤・桃・橙・茶・緑・草・空・紺の八色が用意されている)を与え、また、一つの語類の中それぞれの語形に一つの符号を与える。その場合、類似語類には類似色を、また類似語形には類似符号を与えることが原則であるが、地図の解釈が進むにつれて、語形が似たものでもそれぞれ別語類に属すると判断されるケースや、互いに関係離れた語形でも命名の発想に共通の要素が認められる場合などは同じ語類として扱う例などが現われることがある。もっとも、これらは作図してはじめて発見、あるいは判断の可能な場合が多いので、最初の作図段階では解釈に深入りせず、語形の距離に応じて、淡々と、いわば機械的に、符号を与えざるを得ない。

日本語地図には二四〇種類の符号が使われている(地図見本参照)。これらは日本語地図用に考案したもので、それぞれの符号を刻印したゴム印と、先の八色(ほかに草稿用として牡丹・紫・黒)のスタンプインクが用意されている。二四〇の種類の符号は、符号の向きを変えることにより計約千通りの使い方が可能(●のように一通りの使い方ができないもの、□のように二通り、—のように四通り、↑のように八通りの使い方ができ

るものなど)で、これに色による区別を加えれば約八千の変種を表わしうる。一枚の地図に登載しうる語形の種類は二三〇前後、二枚の地図に分割した場合でも計四六〇程度だから、これだけの符号で充分すぎるはずであるが、現実には、符号が不足して作図に苦心する場面がある。その苦心は現場で作図にたずさわって初めて経験しうるもので、その理由を一口に説明するのはむずかしいが、一つには、ある項目で分出しようとする語形の種類はそれほど多くなくとも、それぞれの語形を構成する形態素がかなりの種類にのぼるときや、音声的小変種を分出しようとするときに、符号に反映させようとする特徴の種類が多様である場合に、それぞれの語形の構成要素や音声の特徴を充分に考慮して符号を与えることが困難なことがあるからである。

たとえば、「月」の項目(未刊)で、ツキ・オツキ・ツキサン・オツキサン・ツキサマ・オツキサマなどの語形群における、接頭辞オの有無、サン・サマなどの敬称の有無・種類、さらに、ツキのツ部分の子音の[ts][tʃ]など破擦と破裂の別、キ部分の母音 [i] [ɨ] [u] などの違い [tsuki] [tsugi] [dzuki] [dzugi] のような無声と有声の対立

などについて、それらの特徴を、符号の大小、ぬき符号とぬりつぶし符号、円系、三角系、四角系など形の系統による区別、符号の向きなどにより一貫した原理で表現しようとするが、限界がある。このような場合に試みるが、地図の解釈により重要と考えられる特徴は、地図の解釈により重要と考えられる特徴から優先的に符号が考慮されるが、その最終的判断は検討会にゆだねられ、研究員全員の討議を経て決められる。

草稿用凡例ができると押印担当者(熟練した女性アルバイト)の手で一地点ずつ白地図の上に押印され、検討会に回される。

三、第二草稿作成↓原稿作成↓最終検討会

第一検討会の方針に従い、小変種をまとめる方向で分類整理を進め、第二草稿地図が作られる。この図では凡例に日本語地図用の大文字のローマ字表記を使用する。

第二草稿地図ができると再び検討会にかけられるが、この段階で「併用処理」の対象語形が決められる。「併用処理」とは、同一地点で二個以上の回答があつて、一方の標準語(と認めた語形)と一致する回答に「共通語的」「新」「上品」「改まった場合」「まれにしか使わなう」およびこれに準ずる注記がある場合、原則としてその回答を割愛するもので

ある。これは、日本語地図には「くつろいで親しい人たちと話し合うとき使うことば」を記載し、これと位相の異なる語を削除しようとする原則に基づく。なお、割愛した語形とその地点は「日本語地図資料」に記録し、研究室に保存してある。

第二検討会では地図の解釈に立ち入って、語形および語形のまとめ方、各語類への色の与え方、各見出し語形への符号の与え方、凡例の見出し語形の配列などが討議され、必要と認めれば第三草稿地図を作ることがあるが、問題がなければ原稿地図作成へと進む。

その後の検討会では一々の見出し語形について念入りに検討し、修正を要する場合は改訂原稿を作ることがあるが、その必要がなければ見出し内容作成へ進む。なお、最終検討会では、分布の分析を基本として、地図の解釈を深め、「解説書」の骨子を完成する。

四、見出し内容作成

「見出し内容」とは、地図の見出し語形にはどのような変種が含まれているか、それぞれの変種(群)はどこに分布するかを一覧表に記録したものである。第四集二四〇図「すみれ」における見出し語形 ZIRO(BO) TARO (BO) の内容を例として示そう。

「見出し内容」は、「注記」(各地点各語形の注記を記入したもの)とともに保存されている。

五、清書版作成

語形の内容	分布(単用)	分布(併用)
dgirotaro	6528. 21.	6538. 46
ジロオタロオ。 giro:taro:	6378. 87	6563. 58
girotaro	6583. 93	
dgirombotarombo (nohana)	6549. 03	
dgirobotarobo	6582. 48	
girombotarombo		6584. 90

最終原稿地図が完成すればそれを印刷所へ送って校正刷を待つのが一般のやり方であるが、この地図の場合は、色別の清書版作成の段階まで研究室員(女性研究補助員)の手で作業を進めている。この段階における最大の難関は併用地点の押印であろう。とくに三語形以上の併用は押印者泣かせである。最終原稿までの地図では各色とも同じ地図に押印するので問題が少いが、清書版は色別に作成するので、各色にま

たがる併用については一ミリの誤差も許されない。さもないと、印刷完成の段階で符号が重なるおそれがある。言語地図の見本(二二八図「まむし」の一部)を示そう。

見本では、九州から中国・四国の一部にかけての地域を、色の区別を省略して示した。地点密度は原図のままであるが、符号の形は一部変更した。詳しくは原図を見てほしい。

「まむし」の図の解釈について、二、三の問題点をあげておこう。なお、この図は二二六図「へび」と関連があり、地図の解釈についても両図を併せて検討する必要がある。

九州南部に一領域をもつマムシ類は、北海道、東北の一部、本州中央部に広い領域を占め、全国的にみて最も強力な語形である。九州東部のマヘビ類は、この地域の外は福島東部と埼玉西部に散在するだけでいずれもマムシと隣接しているから、これらは、それぞれの地域で、マムシをマヘビと言ひ換えることによつて生まれたものと思われる。

九州北西部のヒラクチ類はこの外の地域には見られないが、クチを含む語形としては、別にクチナヘビ・クチサビ・クチハメ・クチマメ・クチメなどが東北、関東、中国、四国それぞれ一部に残存的に分布しており、また

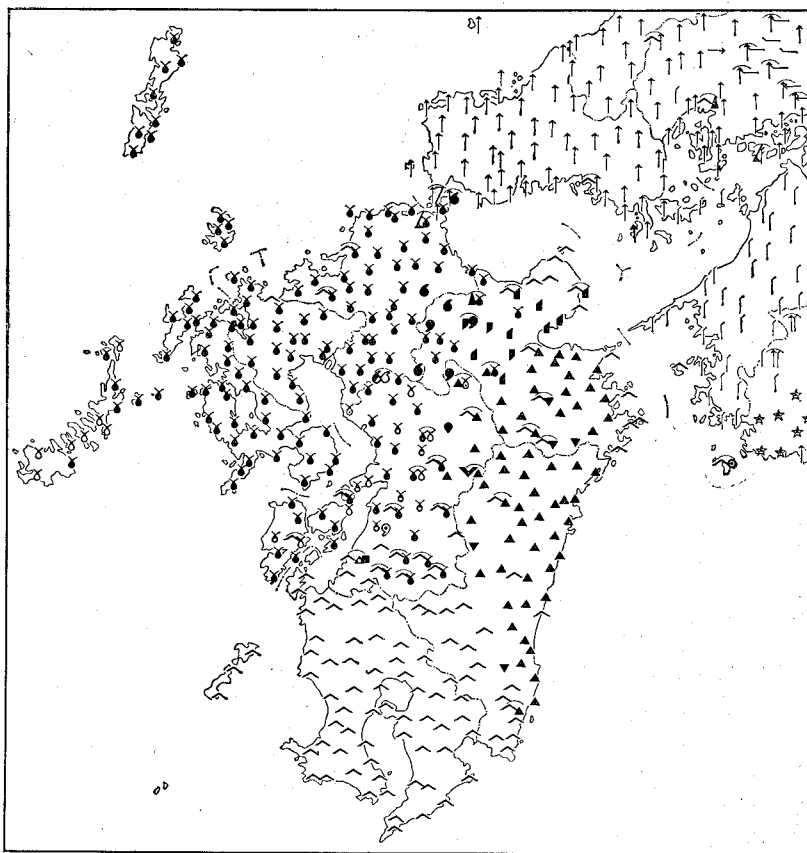
「へび」の図ではクチナワ類が主として西日本に広く分布しているから、クチ・クチ類の歴史的位置は慎重な検討を要する。九州北西部では「へび」をクチナワ、「まむし」をヒラクチと呼んでいるから、ここでは「まむし」をヒラクチナワと呼び、その略称としてヒラクチの語形が生まれたものか。

中国・四国のハミ・ハメ類は、この地域から近畿南西にかけてかなりの領域を占める。

このような語頭がHAの語形は「へび」の図では琉球(PA)が多い(以外には見られず、「まむし」の図では、単独あるいは構成要素(クチナヘビなど)として全国に分布するが、このHA(PA)とHEとの歴史的關係についても、マムシ類、クチ・クチ類などとも

も今後の検討がまたれる。なお、両図の比較にあたっては、意味の変遷(毒蛇をさす名であったものが一般称になったか、あるいはその逆かなど)も考慮しなければならぬ。上代の文献には、蛇類を表わす語としてヘミ・クチナハ・ヨロチなどがあり、ヘビは見られないと言われるが、このヘミとヘビの例を含め、MとBとの関係についても

広くいろいろな平行現象と比較しての言語地理学的分析が必要である。(佐藤亮一)



228図 (項目番号011) まむし(蝮)

- | | | |
|-----------|------------|-------------|
| ∧ MAMUSI | 7 HABUSOO | * KUCIME |
| ∨ ~MUSI | ∟ HAMU | × HIRAKUCI |
| ▲ MAHEBI | ▲ ~HEBI | × HIRAKUUCI |
| ▼ MAHYEBI | △ ~HEEBI | × HIRAKUCCI |
| ♣ MAHEBE | → KUCIBAMI | × HIRAKUT |
| ♠ MAHYEBE | ← KUCINAMI | ● HERAKUCI |
| ● MAHYEBU | ~ KUCIMAME | ♠ HERAGUCI |
| ↑ HAMI | f KUCIBABE | ♠ HERAGUT |
| f HAME | ■ KUCINAWA | ● HYERAKUCI |
| | ○ KUCINA | ♠ HYERAKUT |

Ⅲ 日本の方言地図の歴史

日本の方言地図で最も古いものは、明治38年の「音韻分布図」29面と、明治39年の「口語法分布図」37面である。この地図は当時文部省内にあった国語調査委員会が明治36年に各府県に委嘱した調査をもとにしたものだから、ドイツやフランスの方言地図と較べてもそう見劣りのしない、世界の方言地図の歴史の中でも極く初期のものに属する。

この調査は、(仮名遣ノ改正ト標準的発音ノ参考)とするための音韻29条と、(標準語制定の参考)とするための口語法39条について行われ、ドイツ留学から帰った上田万年を中心として、日露戦争中にもかかわらず、新村出・保科孝一らによって作図された。

調査結果は文部省の「口語法別記」(大6)

などに利用されているが、方言研究史上では報告書中の「大略越中飛騨美濃三河ノ東境ニ沿ヒテ其境界線ヲ引キ此線以東ヲ東部方言トシ以西ヲ西部方言トスルコトヲ得ルガ如シ」という文で知られ、その後の日本の方言研究の主流となった(方言区画論)の種子となる。区画論の結果である日本方言の区画地図は、まず東条操「大日本方言地図」(昭2)として作られ、その後著者や他の研究者たちによって改訂されつつある。

国語調査委員会の計66の地図(46×35cm・多色刷)は、有意義であったと同時に不備もあつた。そこで同委員会は精細な再調査を計画実施した(明41)。その成果は東条操・湯沢幸吉郎らによって20面の音韻分布図、300面

の口語法分布図にまとめられていたが、公刊にいたらぬうちに関東大震災(大12)で全部焼失してしまふ。残念なことであつた。

明治期の方言調査の気運は、大正期に沈滞する。そして昭和初期の隆盛を迎えることになるが、その引金となつたのは柳田国男「蝸牛考」(昭2初稿・昭5改稿)であつた。方言にも価値があり、国の周辺に古語の残ることを(方言周圍論)の名のもとに論証したこの研究は、当時ソシュールの学問の紹介や日本語音声の研究の発展を基盤として言語研究一般の気運が高まりつつあつたこと、農山村の疲弊に対応する郷土研究が盛んになつて来たことなどあいまって、多くの共鳴者を生み、方言分布の研究が盛んに行われた。

当時の熱気を帯びた空気が「方言と土俗」誌などを見るとよくわかる。活躍した人は内田武志・大田栄太郎・佐藤清明・杉山正世・橋正一・藤原与一・山本靖民などで、方言集の中にも方言分布図を加えるものが、昭和6年に降目立ってくる。この雰囲気醸成には「蝸牛考」以下の柳田の諸論考のほか、東条「方言採集手帖」(昭3)、「簡約方言手帖」(昭6)の刊行や、江実・小林英夫・松原秀治・吉町義雄らによる西欧言語地理学の紹介も一役買っていたであろう。上野勇「方言地理学の方法」(昭16)なども出る。

東北大学の小林好日は、昭和13年から16年にかけて東北方言の大規模な調査を行ない、成果は戦後「方言語彙学的研究」(昭25)としてまとめられた。調査項目別、調査地点二千以上といわれる。

当時の方言地図はおもに単語の分布に関するものだったが、文法現象の地理的分布に關しては、橋本進吉・岩淵悦太郎「諸方言に於ける動詞「蹴る」の活用に関する調査」(昭8)や、仲宗根政善「加行変格「来る」の国頭方言の活用に就いて」(昭12)などがある。杉山正世の愛媛県周桑郡の「死ぬ・去ぬ」の調査は、未見であるが最も古いものらしい。

音韻については目立ったものが見当たらないが、アクセント研究には注目したい。服部四郎「国語諸方言のアクセント概観」(昭6以降)を導火線として、強力な後継者が生まれた。金田一春彦「現代諸方言の比較から見た平安朝アクセント」(昭12)の分布図は最も早い全国図のひとつで、平山輝男の調査結果なども参考にしている。ただし、この種のアクセント分布地図はいわば総合地図だから、一種の方言区画図といえる。

戦後の魁は土川正男「言語地理学」(昭23)であろう。そのほか石黒武顕「鳥取県方言分布の実態」(昭32)、珍らしく語ごとのアクセントに関するものとして岡田荘之輔「たじまアクセント」(昭32)などがある。研究論文としては、長尾勇の「地蜘蛛考」(昭29)、「俚言に関する多元発生の仮説」(昭31)、「蛭蝮考」(昭33)などがあり、方言周囲論の限界を論じた。東条操編「日本方言学」(昭29)中にも言語地理学の章がある。

かくして「日本言語地図」の時代を迎えるわけであるが、そのころ学界の大きな刺激となったのは、昭和32年以降に行われた新潟県糸魚川市の調査であろう。成果は、グロータース「麦粒腫の方言(英文)」(昭33)、柴田

武「方言の古い層と新しい層」(昭33)、徳川宗賢「カマキリの方言分布を解釈する」(昭34)以下数多いが、地図を作るだけでなく、その様相を通じてさらに深い段階を推理しようとする積極的な姿勢が迎えられたためか、多くの新進の研究者を生み出しつつある。総合地図集の刊行が待たれる。なおこの調査は「日本語地図」作成の準備の意味をこめてスタートしたものであった。

戦後学界のもうひとつの大きな流れは、広島の藤原与一を中心とする研究であろう。その研究は既述のように戦前に胚胎するが、「中四国方言の地理学的研究(英文)」(昭31)を刊行する一方、昭和30年ごろから若い多くの学徒と共に、瀬戸内海地域を中心とする大規模な地図の作成を計画し実行してきた。深い思索を基礎とするこの調査の片鱗は「方言研究年報」などを通じて窺うことができるが、地図集の公刊が期待される。

昭和40年代以降の地域的地図集は数が多いが、紙数の関係から、広戸惇「中国地方五県言語地図」(昭40)だけを挙げるにとどめる。最後に、外国語を材料とした小倉進平「南部朝鮮の方言」(大13)「朝鮮語方言の研究」(昭19)なども付記しておこう。(徳川宗賢)

世界の主な言語地図

フランス言語地図(一九〇三〜一〇年、パリ) E・エドモンの調査した資料をJ・ジリエロンが作図した。調査項目は始め約一四〇〇、最終的には一九二〇、一九二〇枚の地図が三シリーズに分けて出版された。調査地点は六三九。フランス言語図巻ともいう。

フランスではその後ドーザラの提唱で、地域別言語地図作成の計画が一九三九年にたてられた。調査項目は、全地域に共通のものとして、ジリエロンの項目から九六〇項目が選ばれ、さらに、地域の特性に合ったものが加えられた。これまでに、リヨン(一九五〇〜五六年)、ガスコニュー(一九五四〜六六年)、中部マシフ(一九五七〜六七年)、東部ピレネー(一九六六年)、ワロンヌ(一九五三〜五五年)の各地域の言語地図が出版されている。

イタリア・南スイス言語地図(一九二八

〜四〇年、ツォーフインゲン) G・ロールフスら三人の言語学者が調査したものを、K・ヤーベルク、J・ユートが作図したもので、八巻一七〇五枚の地図から成る。調査項目数は地点によって異なり、八〇〇〜四〇〇〇のあいだ。普通は二〇〇〇。

地域別のものである。コルシカ(一九三三〜四二年)、サルデニア(一九六四年)などがある。また、第二回目のイタリア言語地図の計画が一九二五年にたてられたが、現在あまり進んでいない。

イベリア半島言語地図(一九六二年)、マドリッド) ポルトガル・スペイン、カタルニアにまたがる地域五二八地点の言語地図。地域的なものとして、カタルニア(一九二三〜三九年)、アングダルシア(一九六一〜六五年)等のものがある。

ルーマニア言語地図(一九三八年) 戦前から始められ、現在も続いている。これと並行して、新しく地域別の調査も行われ、現在出版が始まっている。

ドイツ言語地図(一九二六年) 一九世紀にG・ヴェンカーによって始められた調

査は、F・ウレデーに引きつがれ、マールブルクのドイツ方言研究所において一九二六年から出版が始まり、今日に至っている。膨大な資料に比べて、出版される地図は多くない。

これとはべつに、一九二一年に、語彙の地図(Deutscher Wortatlas)の計画がたてられ、W・ミツカを中心に進められ、一九五一年の第一巻以来出版が続けられている。

スイスドイツ言語地図(一九六二年、マールブルク)

チロル言語地図(一九六五年)、インスブルック)

オランダ言語地図集、オランダを一五の地域に分けた地域別言語地図で、一九三〇年の南東フランドル地方の分以来、いくつかが出版されている。

ニューイングランド言語地図(一九三三〜四三年、プロヴィデンス) アメリカでは、このほか、合衆国全域の言語地図が計画されていて、現在、すでに調査を終了している地域もある。(高田 誠)

言語地図への批評

地図の一枚を広げてみる。だれでも方言の差のあることは知っているが、符号と色によって鮮かに示された際立った地域差に、いまさらながら強い印象を受けた人も多いだろう。「方言について知る一番早い方法は国立国語研究所から出版されている『日本語地図』を眺めることであろう。

三〇分もこの地図を眺めれば、自分の持っていた日本語という抽象的なイメージが根底からゆすられる思いをする人は多いと思う。例えば(中略)『とうなす』とか、『せともの』というような単語で通じあえる人がごく限られていることには一驚をきつするにちがいない。「日本語地図」の頁を閉じる時、誰でもが抱くいつわらざる気持は、これで日本語は通じあえるのだろうかという素朴な疑問であろう(千野栄一『言語』一九七三年四月号へ伝達のミステリー)

地図を見る時、まず目をやるのは自分の生まれ故郷だろう。「私の生れ、育った京

都のあたりを見ていると、自分では使わな
いけれども、こどもの時には耳にすること
珍しくなかったという音や語の多いことに
気づく。セ・ゼの「[a・e]」やクワ・グワ
とカ・ガの区別などもその一つであり、そ
れが、まだ細々ながら、京都の近くでも生
きつづけていることがわかる。(中略)こ
の地図を眺めながら、ああ、あんなことば
もあつたのだなと思ひ出しはするものの、
〔きなくさい〕を)カンコクサイだったの
か、それともカンゴクサイだったのかは、
もうさだかではないというように、人生の
たそがれにさしかかっている今、過去の思
い出の中に、日に日にほやけて行こうとす
る少年時代を、その頃使ったなつかしい方
言語彙と共に、感傷にふけりながら、かみ
しめているのである(浜田敦『言語生活』
一九〇号へわたしの読んだ本)

地図に対する目は、次に故郷から遠く離
れた地域にまよってみられる同じ表現に
とんでいくだろう。そしてそれがそのま
ま、言語地理学的興味につながっていく。

「ハタケがハダケ・ハダゲ・ハダギと有声
化している地域は、北陸・関東東部・東北

・北海道であるが、琉球列島の八重山では
バダギと子音Kが有声化している。このよ
うな有声化現象は、単なる音声現象ではな
くて、もっと根深い理由、よほど古い時代
の基層語の残痕とも推定されないことはな
い(福田良輔『言語生活』二二三二号へわ
たしの読んだ本)「国語史における一時代
前の古い姿が、いわゆる方言周圏論を証明
するような分布で、歴然と地図の上に現れ
ていることが多いのである。それらは、文
献欠如のために、実証することのできない
ような国語史のアナを埋めることのために
しばしば役立つであろう(浜田敦『言語
生活』前掲号)

そこから、日本語・日本民族の底流をさ
ぐるうとする視点も出る。「言語の分布図
の多様性を通して、一民族の統一された国
家としての日本の顔に裏側から様々の凹凸
や彩色をほどこすものとなりはしないか、
と思う。すなわち、そこから島尾敏雄があ
えて「日本」という呼び方をしりぞけて
「ヤポネンヤ」という呼称でとらえようと
する陰影に富んだいま一つの日本民族の顔
が浮かびあがってくるのではないか、と思

うのである」(川満信一『現代の眼』一九七一年一月号へミクロ言語帯からの発想) ところで方言地図には特定地域を対象とする微視的地図と全国を対象とする鳥瞰的地図とがある。言語変化の詳細を写し出す微視的地図は、従来(言語学者)に好まれ、日本語全体の歴史を写し出す全国地図は(国語学者)に好まれる、といった傾向があった。いま『日本語地図』の完成によって、微視的地図と全国地図とは結ばれる可能性が出たと言えよう。「方法論が立ったので、みんながその方法論によって研究する」とよい。(中島健蔵『言語生活』二一五号「日本語地図」の意義)、「この地図を土台とした全国各地のより詳細な語彙研究も促進するであろう。つまり、この全国図を土台として、ここに見られる境界地帯などの問題地域を拡大鏡で見るとような形で地域研究が各地で行なわれることにより、全国的な分布の動態もより明確になってくるだろう」(鏡味明克『方言研究のすべて』(語彙について))

また、こんなことばもある。「全国的な方言分布図は、言うまでもなく国語調査委

員会の音韻・口語法に関するものが従来唯一のもので、ともかくも有益だったが、今回の地図はそれと比較するのも愚である」(大岩正伸『国語学』七三集(国語学界の展望))、「言語地理学的な研究と文献による語史研究とをそれぞれ独自に行なうた上で、その語に応じて考え合わせることによって、はじめて生きた語の歴史を明らかにしてゆくことができるのではないか」(前田富祺『国語学』八〇集「日本語地図」について)

かくして、これらのことばは将来への期待をふくらませ、地図作成にたずさわるものの士気を鼓舞するのであるが、次のような方法論についての批判は傾聴に値いしやう。「研究所の過去の調査作業は、八ヶ年(に)わたり、六十人以上の人びと(しかも地方研究員各位と研究所員諸氏と)によっている。この結果が、言語地図で、項目ごとによこに一元的にとりあつかわれている。ここには、大きな難点がある。地図資料の均質性においてである。(中略)この均質性を得るためには、広域調査も、年限すくなくすまずことにしなくてはならない。作

業員は、定められた合理的方法に忠実に順う、均質的な活動家たちであることが望ましい。となつて、調査員数には、おのずから、限度がみとめられることになるう」(藤原与一『国語学』七〇集(言語地図の理想をめぐって))

そのほか次のような提言も参考になる。「このような大事業は、国勢調査と同じようなもので、今の研究所を数倍にして全員が掛つても足りない位である」(M・O『日本の音声学会会報』四二年八月号(新刊批評))、「地図に採られた項目、語の周辺の意味分野についての調査をしたらと思います」(井上史雄『言語生活』二五五号(座談会・最近の方言集))

地図に対する学問的批評は常に真摯に受けとめていきたい。納得できるものは大いにとり入れて将来の計画の参考に使いたいと思うのであるが、言語変化の激しい現状に鑑み、日本語の貴重な資料方言を組織的にしかも早急に記録する作業は、国立国語研究所に課せられた責務のひとつだと痛感するのである。

(本堂 寛)

VI 将来の問題点 (座談会)

出席：徳川宗賢・本堂寛・佐藤亮一・高田誠

(国立国語研究所地方言語研究室)

A 『日本語地図』三〇〇枚を作ってきたわけだが、このあと何をすべきか、どんな問題が残されているかというのが話題である。

B いままで地図を作ってきた過程で気付いた点を、いくつかの観点に分けて考えてみよう。それから、将来何をなすべきか、新しい計画をたてるとすれば、どういうことを盛り込むべきかということへと話が進むだろう。

C 全く新しいべつの計画を実際にやるかどうか、あるいは、誰がやるかということはいろいろべつにして……。

もっと多くの項目で

B 『日本語地図』の分布をみると、項目

ごとに違った分布を示しているわけだが、二八五項目という数は言語全体の膨大な量からみるとごくわずかな部分しか切りとっていないということになる。調査をすればするほど、もっといろいろなことが分かると思われる。

D 項目を増やすということか。

C どういうものをやるかということとはべつのこととして……。

A ある個人が、たとえば、三万語知っているとして、二八五ということは約一〇〇分の一聞いてきたのかというと、なかなかさうもならないと思う。たとえば、「まぶしい」という項目は「太陽を見たとき」という限定で聞いているが、その他の場合の「まぶしさ」

ということを加えて考えると、いろんな場合がありそうだ。一〇〇分の一まではいいのではないのではないか。

D 外国のものなどは、項目数は千の位のものがふつうだ。言語体系全体を見ようとするならば、数千から万の項目が欲しい。

消えていくものの保存

B 方言の将来ということを考えるとき、文法・音声・アクセントなどは、まだ、将来も調査可能だと思うが、語彙の分野はいま調べなくては、将来、調査は不可能だと思う。

D いや、文法・音声だっいま調べなければいけないと思う。

A 古いものの残存を優先して調べるとい

ことに對して、「古いものは消えていったっていいじゃないか」という意見もあると思うが……。

B ことばという日本民族の無形の「遺産」を記録するということは大切だと思う。有形の文化遺産の保存となんら変わるところはないはずだ。

C 地図に作らなくてもいいから、地域ごとの方言を、とにかく、合切袋に詰め込んでおく考え方もある。そうすれば、保存ということとは、一応、達せられるということになる。

D しかし、雑多に詰め込んだのでは何の役にも立たないので、将来、他と比較できるように、体系だてて記述することが望ましい。

国語史との関係

A 文献との対比ということから考えると。

B 方言と文献との対比から豊かな国語史が書けるとすれば、文献に現われる諸語形と対比できるものを項目に選ぶべきだろう。

D 文献に現われることばというのは、非常に限られたものしかないのだから、文献国語史の分野から、方言でどういふものを調べれば国語史の流れが分るかということについて提言があれば、方言と文献国語史の協力とい

うことは前進すると思う。

C 新しく調査するとして、それはやはり、言語地理学の基本ののっとってやる、つまり、地理的分布の解釈から語史を考えるという方向なのだろうか。

A ということは……。

C 文献に現われるものとの対比ということから、言語地理学の方法論を再検討する方向か、それとも、文献には現われない語史をさぐるという方向か、ということだ。

B やはり、その両方が相補っていくべきなのだろう。

A べつの言いかたをすれば、「言語地理学」のために方言の調査・研究をするのか、「日本語」のために言語地理学の研究をするのかという問になるろうか。

個人の資金で、自分の時間を費してやるのなら、個人的な興味で、たとえば、一枚の地図だけにかかずらわっていてもいいだろうが、国民の税金を使って研究を行っている以上、われわれの研究も「日本語」の研究のためになければならないのだから。大仰な言いかたをすれば、国民の信託に応える必要があるだろう。

C もちろんだが、「日本語」の具体的事実

を追うあまり、言語学的な理論付けをおろそかにしてはなるまい。両様相俟ってはじめて真の進歩があるのだから。

B 文献との対比ということから言えば、文法や音声の分野も有力である。ただ、このようなものは、国の東西に分かれて分布するからといって、そのまま、古形の残存であるという解釈が可能かどうかは問題だが……。

A たとえば、ジャ・ヤ・ダなどは音声の問題でもあるから、ダが出雲と東日本に分かれて分布するから古いといった解釈は当たらない。個別の変化が起こりうるから。しかし、サカイ・カラ・ケンといった、語根の違うものが離れて分布していれば、やはり、周圏論的分布と考えることができよう。文法の分野にもいろんな研究の可能性がある。

位相のちがいがい

C 文法、あるいは、文表現という面から言えば、語彙についても同じことが言えようが、広い意味の「位相」の違いということが大きな問題となる。われわれの調査では、近所の人とうちとけて話すときのことばを聞いたわけであるが、ある個人の手持っている言語は決してひとつではない。標準語レベル、地

方共通語レベル、くだけた場面、改まった場面、等々、それぞれによって使いわけているわけだ。たとえば、終助詞の「よ」にあたる方言形を求めようとしても、標準語の「よ」というのが、一体、どのような文体的レベルにあるのかを相手に理解してもらおうのは大変だ。

A たとえ、相手が何か答えたとしても、それが方言のなかのどのレベルのものであるか、これまた分からない。やはり、その地点の終助詞なら終助詞全体をみて、それぞれのあいだの違いを聞きながら、つまり、その地点の終助詞全体の体系を明らかにしながら、調査しなければならぬだろう。

標準語のひろがり

A 一種の位相差だろうが、標準語の分布を調べるのもおもしろい。「改まったら何と言いますか」と質問すれば、全国おしなべて標準語が出るかという、かならずしもそうではないようだ。たとえば、熊本県の球磨川流域の調査では「つむじ」という標準語はほとんど知られていなかったし、『日本語地図』をみても、標準語形の分布はさまざまだ。

C ある限られた地域にしか分布しない標準

語形が、「では改まったときは」と質問したとき全国に広く現われるかどうか……。

D 学校教育やNHKなどで標準語は広く使われているわけだが、どういふ分野の標準語がよく使われているか、改まった場面でもついに標準語が用いられないのは言語のうちどの部分であるか、さらに、それらに地理的な特性があるかということは、大いに興味のある問題である。

B 標準語教育という面での国語教育に役立つ面も多からう。

地方の文化的中心地

C 他から被る言語変化の波というのは、古くは京都、新しくは東京といった大中心地からの標準語の影響ばかりではない。地方の小中心地も問題とならう。

A その問題は、「新しい計画」という話題からは多少外れるが、興味ある点である。たとえば、新潟県糸魚川市での詳しい調査では、糸魚川市の中心部のことばが周囲に少なからざる影響を与えていることがわかっている。しかも、それらの語形は、必ずしも、標準語形ではないのだ。『日本語地図』のこの地域の調査地点は二、三地点しかないの

で、これらの様子は分からないし、それらの地方的な勢力を持った語形は、全国的な視野でみると、ほとんど意味がなくみえる。

B しかし、現実には、標準語の影響に加えて、そのような地方の中心地からの影響が複合したかたちで周辺に伝播していくと考えられ、それらの集積の結果が日本語全体の変化となって現われるのであらうから、地方の小中心地の問題は重要である。

D 全国規模の地図でも、ある程度は地方の中心地をみることできよう。たとえば、東北の仙台、名古屋、北九州その他の言葉が近隣へ影響を与えているようすは、『日本語地図』からもよく分かる。詳しく調べなければ分からないが、二〇万都市くらいならば、その様子がうかがえるのではないだろうか。

C 国立国語研究所が行っている各種の社会言語学的調査とのからみ合わせも考えられよう。ある都市で行われている言語生活の社会言語学的な位相の違いと、その都市周辺の地理的分布との関係を見ると、標準語使用の問題も含めた言語変化の研究に、さらにべつな観点が生まれるのではないか。

A できあがった三〇〇枚の地図をめぐる問題もあるが、このへんで……。